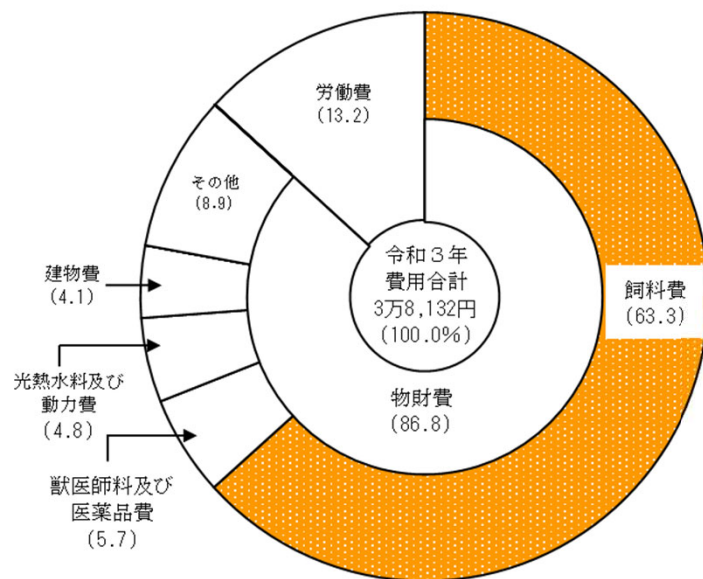


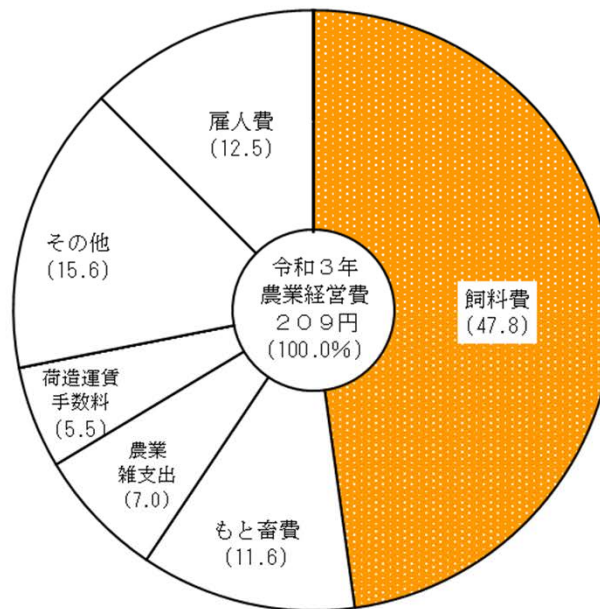
【参考】畜種別の生産費の構成割合（令和3年）

- 濃厚飼料中心の肥育豚、採卵鶏、ブロイラーについても、飼料費が占める割合は5～6割と多くの割合を占める。

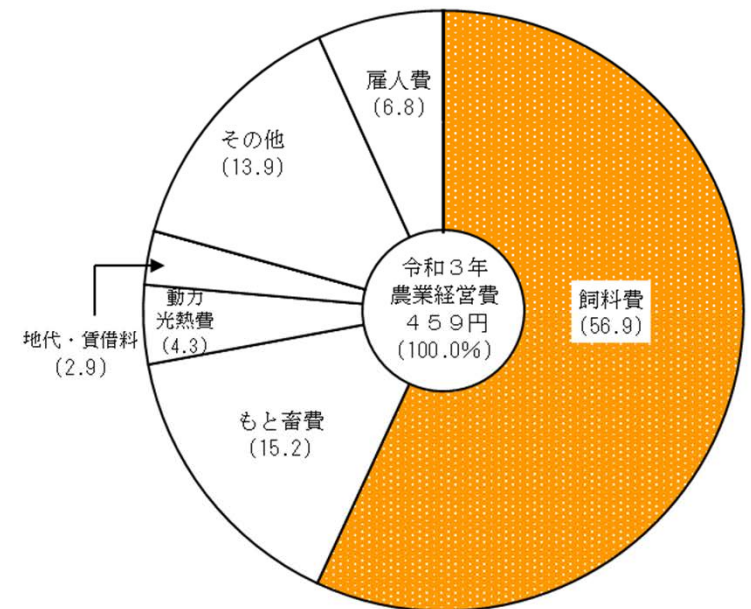
肥育豚



採卵鶏



ブロイラー



資料：農林水産省「畜産物生産費統計」および「営農類型別経営統計」

注1：肥育豚は1頭当たり、採卵鶏は鶏卵1kg当たり、及びブロイラーは1羽当たり。

注2：飼料費には配合飼料価格安定制度の補てん金は含まない。

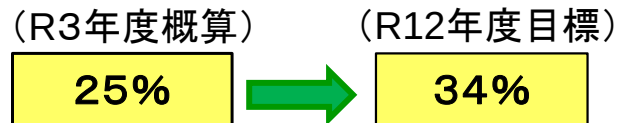
注3：肥育豚については生産費統計、採卵鶏及びブロイラーについては営農類型別経営統計から算出しているため、生産コストの考え方が異なることに留意。

飼料自給率の現状と目標

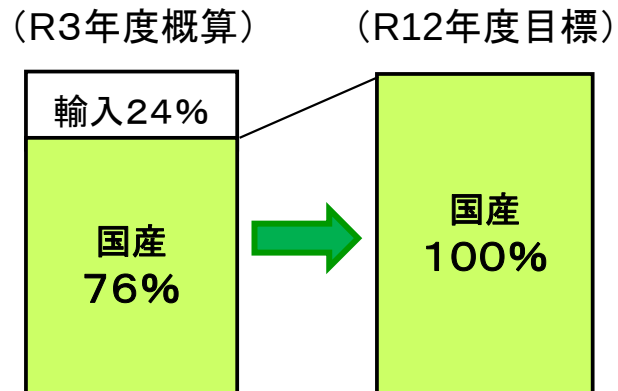
- 令和3年度(概算)の飼料自給率(全体)は25%。このうち、粗飼料自給率は76%、濃厚飼料自給率は13%。
- 農林水産省では、飼料自給率について、粗飼料においては草地の生産性向上、飼料生産組織の高効率化等を中心に、濃厚飼料においてはエコフィードや飼料用米の利用拡大等により向上を図り、飼料全体で34%(令和12年度)を目標としている。

飼料自給率の現状と目標

飼料全体

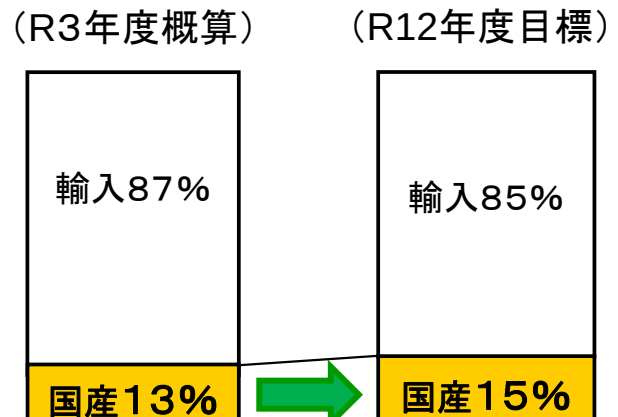


粗飼料



- 乾草
- サイレージ
牧草、青刈りとうもろこし、稲発酵粗飼料(稲WCS)
- 放牧利用
- 稲わら
- 野草(林間地等)

濃厚飼料



- 穀類
(とうもろこし、飼料用米等)
- エコフィード
(パンくず、豆腐粕等)
- 糟糠類・かす類
(ふすま、ビートパルプ、大豆油かす、菜種油かす等)
- その他
(動物性飼料、油脂等)

近年の飼料自給率の推移

年度	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2	R3 (概算)
全 体	26%	26%	27%	28%	27%	26%	25%	25%	25%	25%
粗 飼 料	76%	77%	78%	79%	78%	78%	76%	77%	76%	76%
濃 厚 飼 料	12%	12%	14%	14%	14%	13%	12%	12%	12%	13%

- 令和3年度の飼料自給率[概算]は、粗飼料自給率は変わらず、濃厚飼料自給率は1ポイント増加したものの、全体としては前年同の25%となった。
- 粗飼料自給率は、飼料作物の作付面積が横ばいで推移したことに加え、夏季の少雨の天候の影響等があったものの単収も前年同であったことから、前年同の76%となった。
- 濃厚飼料自給率は、主原料であるとうもろこしの輸入量が減少し、飼料用米の利用量が増加したことから、前年度から1ポイント増の13%となった。

(参考)海外の飼料自給率

1. 韓国における飼料自給率

【粗飼料】

単位：千トン

	2000	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
国産	2,793	3,520	3,334	3,060	3,470	3,742	3,923	4,255
輸入	599	909	961	1,228	971	944	896	906
計	3,392	4,429	4,295	4,288	4,441	4,686	4,819	5,161
自給率 (重量ベース)	82.3%	79.5%	77.6%	71.4%	78.1%	79.9%	81.4%	82.4%

資料：韓国農林畜産食品部ほかWeb公開情報

【配合飼料原料】

単位：千トン

	2000	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
国産	3,923	4,510	4,824	5,403	5,816	5,645	5,276	5,222
輸入	11,403	14,628	14,594	13,546	14,069	14,954	15,736	15,739
計	15,326	19,138	19,418	18,949	19,885	20,599	21,012	20,961
自給率 (重量ベース)	25.6%	23.6%	24.8%	28.5%	29.2%	27.4%	25.1%	24.9%

資料：農林畜産食品主要統計(2022年)

注1：畜産用(代用乳用を含む)と養殖魚用の合計。

注2：配合飼料の生産にあたって使用された原料ベースで整理。

2. EUにおける飼料自給率(2021/22暫定値)

2021/22年度のEUの飼料需要量は、粗たんぱく質ベースで7,192万トンとなったのに対し、域内供給量は5,534万トンとなり、域内産原料による供給比率は76.9%。

(輸入油糧種子を域内で加工した後の油かす等を域内産とみなす。)

資料：農畜産業振興機構 調査情報部
(原典：EU委員会「EU Feed Protein Balance Sheet」)

国産飼料基盤に立脚した生産への転換

- ・酪農・肉用牛の生産基盤の強化のためには経営コストの3～5割程度を占める飼料費の低減が不可欠。
- ・このため、水田や耕作放棄地の有効活用等による飼料生産の増加、草地等の生産性向上、飼料生産組織の育成・強化、食品残さ等未利用資源の利用拡大の推進等の総合的な自給飼料増産対策により、輸入飼料に過度に依存した畜産から国産飼料に立脚した畜産への転換を推進している。
- ・また、持続的な畜産物生産のためにも、国産飼料の生産・利用の拡大を進めることが重要。

○ 飼料増産の推進

①水田の有効活用、耕畜連携の推進



青刈とうもろこし



稲発酵粗飼料※1

②草地等の生産性向上の推進



難防除雑草の駆除



気候変動に強い品種の導入

③放牧の推進



耕作放棄地放牧



集約放牧

○ 子実とうもろこし等の生産・利用拡大

- ・子実とうもろこしの生産実証に必要な収穫専用機のレンタルや導入等を支援



専用ヘッダの収穫



子実とうもろこし

○ エコフィード※4等の利用拡大

- ・食品加工残さ、農場残さ等未利用資源の更なる利用拡大



余剰食品の飼料化

生産増加

利用拡大

生産増加

○ コントラクター※2、TMRセンター※3による飼料生産の効率化

- ・作業集積や他地域への粗飼料供給等、生産機能の高度化を推進



飼料収穫作業



TMR調製プラント

国産飼料基盤に立脚した畜産の確立

飼料自給率

	R3年度 (概算)	⇒	R12年度 (目標)
飼料全体	25%	⇒	34%
粗飼料	76%	⇒	100%
濃厚飼料	13%	⇒	15%

※1 稲発酵粗飼料: 稲の実と茎葉を一体的に収穫し発酵させた牛の飼料 ※2 コントラクター: 飼料作物の収穫作業等の農作業を請け負う組織

※3 TMRセンター: 粗飼料と濃厚飼料を組み合わせた牛の飼料(Total Mixed Ration)を製造し農家に供給する施設 ※4 エコフィード: 食品残さ等を原料として製造された飼料

近年の飼料穀物の輸入状況

- 飼料穀物の輸入量は、近年約1,300万トン程度で推移。主な輸入先国は、米国、ブラジル、オーストラリアなど。
- 飼料穀物のほとんどは輸入に依存しており、特に、使用割合が高いとうもろこしは、米国、ブラジルに大きく依存。

我が国の飼料穀物輸入量 (万トン)

	R1年度	R2年度	R3年度 (確々報値)
とうもろこし	1,169	1,155	1,163
こりゃん	30	25	18
小麦	30	34	38
大麦	91	95	102
その他	6	5	5
合計	1,326	1,314	1,327

注：その他とは、えん麦、ライ麦である。

世界のとうもろこしの輸出状況 (百万トン)

	R2/3輸出量	R3/4輸出量	R4/5輸出量 (予測)
①ブラジル	21.0(12%)	48.3(23%)	50.0(29%)
②米国	69.8(38%)	62.8(31%)	47.0(27%)
③ウクライナ	23.9(13%)	27.0(13%)	25.5(15%)
④アルゼンチン	40.9(22%)	34.4(17%)	25.0(14%)
世界計	182.7(100%)	205.7(100%)	173.8(100%)

我が国のとうもろこしの主な輸入先とシェア

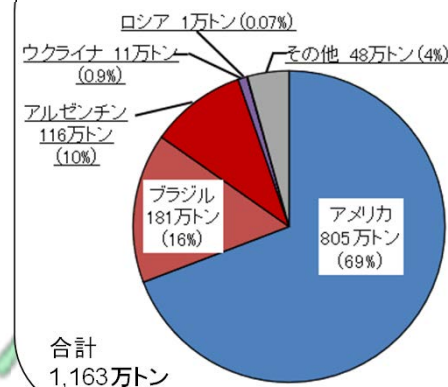
	R1年度	R2年度	R3年度 (確々報値)
米国	47%	69%	69%
ブラジル	50%	30%	16%

米国(令和3年度)
とうもろこし(69%)
小麦(1%)

米国産とうもろこしの需給 (百万トン)

	R2/3	R3/4	R4/5 (予測)
生産量	358.4	382.9	348.8
輸入量	0.6	0.6	1.0
国内需要量	306.7	317.1	303.7
飼料用	142.4	145.3	134.0
エタノール用	127.7	135.3	133.4
その他	36.6	36.5	36.3
輸出量	69.8	62.8	47.0
期末在庫量	31.4	35.0	34.1
期末在庫率(%)	8.3	9.2	9.7

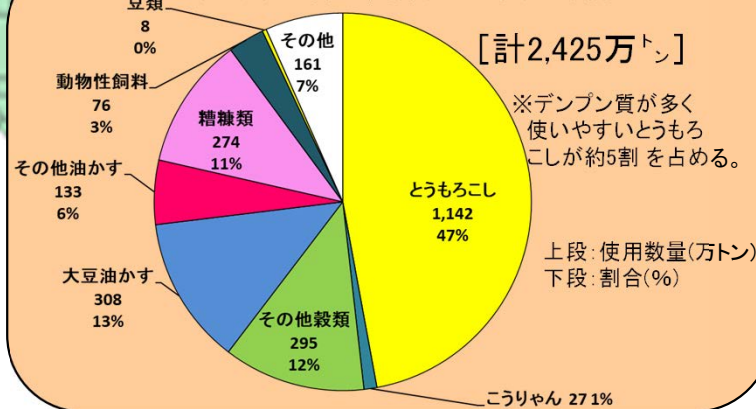
直近の飼料用とうもろこしの
輸入国及び輸入量(令和3年度)



ブラジル
(令和3年度)
とうもろこし
(16%)

オーストラリア
(令和3年度)
大麦(100%)
小麦(92%)

配合・混合飼料の原料使用量(令和3年度)



※デンプン質が多く
使いやすいとうもろ
こしが約5割を占める。

上段：使用数量(万トン)
下段：割合(%)

配合飼料：家畜種とその成長ステージに応じた栄養素の要求量を満たす
ように、とうもろこし、大豆油かす等を混合した飼料
混合飼料：とうもろこし、大豆かす等数種類の原料を混ぜた飼料

資料：財務省「貿易統計」、USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates (April 11, 2023)」、(公社)配合飼料供給安定機構「飼料月報」
注：米国産とうもろこしの需給については、1bu＝約0.025401tとして農林水産省飼料課において換算。

配合飼料価格に影響を与える要因の動向

- とうもろこしの国際価格は、令和2年8月頃まではエタノール向け需要の減少等を背景に3ドル/ブッシェル台前半で推移していたが、9月以降、中国における需要増加やコロナ禍からの経済回復等により上昇。令和3年4月末には約8年振りに7ドル/ブッシェルを突破。その後、5ドル/ブッシェル前後まで下降したが、ウクライナ情勢を受けて上昇し4月には8ドル/ブッシェルを突破。その後需給ひっ迫の懸念が後退し一時下降したものの、米国の収量が下方修正されたこと等を受け、令和5年4月現在は6ドル/ブッシェル台中盤で推移。
- 大豆油かすの国際価格は、令和2年4月以降、概ね300ドル/ショートンを下回って推移していたが、9月以降、中国の飼料需要の拡大等により上昇。令和5年4月現在は460ドル/ショートン程度で推移。
- 海上運賃（フレート）は、船腹需要の減少によって令和2年5月には40ドル/トンを下回っていたが、以降は需要の増加により上昇し、令和3年10月には79ドル/トンまで上昇。その後船腹需要の減少等の影響で下落し、令和5年3月現在は53ドル/トン程度で推移。
- 為替相場は、大きく変動しており、令和5年4月現在は132円/ドル程度で推移。

＜とうもろこしのシカゴ相場の推移（期近物）＞



注：シカゴ相場の日々の終値である。※1ブッシェル=25.4kg

＜大豆油かすのシカゴ相場の推移（期近物）＞



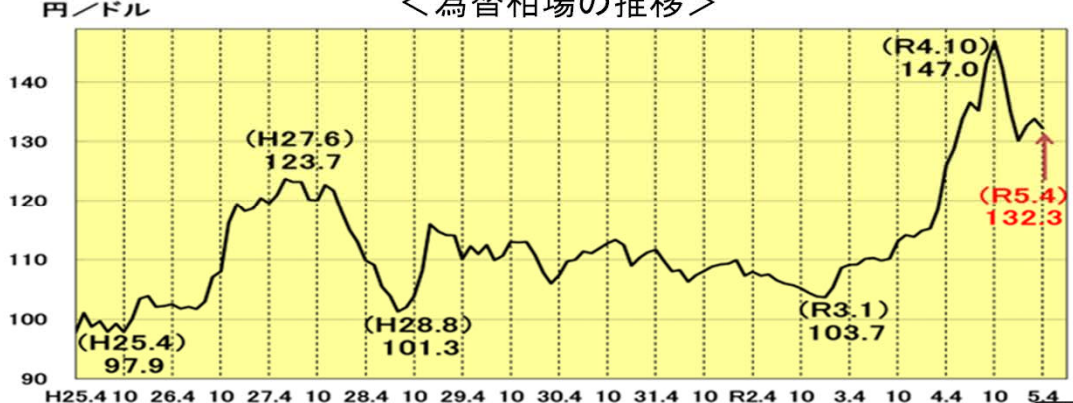
注：シカゴ相場の日々の終値である。※1ショートトン=907.2kg

＜海上運賃の推移（ガルフ～日本）＞



注：月平均値である。（令和5年3月の値は第5週までの平均値）

＜為替相場の推移＞



注：日々の中心値の月平均である。（令和5年4月の値は11日までの平均値）